

保育内容・造形表現における平面技法についての考察

佐藤 有紀

SATO Yuki

本稿は『保育内容・造形表現Ⅰ』の授業での表現技法の実践とその活動記録の実践報告である。この授業は、子どもと表現活動（造形）を行う上で必要な基本技術の取得を目標に設定されている。今回は基礎技術の取得の他にその取り組みに焦点をあて、学生の活動記録を振り返りながら、各平面技法の実践を行う意味を改めて考えてみたい。そしてその技法を使う造形活動を実際に保育園の子どもたちと行うことによって、授業で行う絵画技法の意味を改めて考え、造形表現の実践における保育・教育者に必要な学びと環境について考察した。

キーワード：保育、造形活動、表現、平面技法、活動記録

1. はじめに

本学の「保育内容・造形表現Ⅰ」の授業では、主に基礎的な平面技法を使用した造形活動を行う。

新保育士指針の表現の領域では、感じたことを言葉や態度などで表現することを通して豊かな感性や表現する力を養うことが目標とされている。そのためにはまず保育者が表現活動に興味を持ち楽しむことが重要である。そこでこの表現(造形)の授業では、基礎的知識・技能を身に付けることと同時に、学生自身が様々な画材や素材の特質を味わい、活動そのものの楽しさを体験することを目的とした内容となっている。

保育の現場では保育所保育指針のねらいにもあるように子どもたちの表現活動を最終的に仕上がった作品という視点ではなく、その過程で子どもたち自身が感じていることや工夫に気づきしっかりと受け止める必要がある。それに対して大学の

授業での評価は、主に課題作品とそのまとめとして制作した応用作品で行っており、制作過程での学生の活動そのものに対する評価をするための振り返りが十分にできていなかった。

そこで、今回より学生自身による各回の活動記録を授業後に提出、毎回その授業についての簡単なフィードバックを行うことにした。これは学生自身が、活動したこと自体を自分の記憶に留め、活動の意味を自分なりに捉えるという目的もある。

本稿ではその記録の一部を挙げながらそれぞれの平面技法の内容を振り返り、学生にとっての実践の意味を改めて考えてみたい。

また今回筆者は、これらの平面技法を用いた実践活動をいくつか保育園の子どもたちと実践する機会を得た。同じ平面技法を保育の現場で行い、その二つの実践から「保育内容・造形表現Ⅰ」の授業において、学生が子どもたちと造形活動をする際に重要な力を養うために必要な経験や環境に

ついて改めて考えてみたい。

2. 平面技法の実践活動とその記録について

対象者：夙川学院短期大学「保育内容・造形表現 I」受講者 6 7 名

期間：平成 30 年 4 月～7 月

平成 29 年度の『保育内容・造形表現 I』のシラバスは以下のとおりである。

〈授業のテーマ及び到達目標〉	
造形活動で用いる素材や画材のそれぞれの特質を味わい、活動そのものの楽しさを体験する。また固定概念にとらわれず新しい視点をもつことにより、素材そのものの特質を活かし、自ら積極的に造形活動を発展させる力を養うことを目標とする。	
〈授業の概要〉	
実習形式で行う。保育の現場で必要な絵画技法を実践し、いくつかの平面作品を制作する。自らの活動を通して表現の意味を考えながら子どもの表現について学び、保育の現場で必要な造形活動の基礎的知識や技能を身に付ける。	
〈授業内容〉	
1. ガイダンス	
2. 子どもの絵画技法について	
3. 平面技法①水彩絵具 にじみ絵	
4. 平面技法②切り絵（下絵 カutting）	
5. 平面技法②切り絵（カutting 仕上げ）	
6. 平面技法③（水彩絵具 合わせ絵デカルコマニー 糸引き絵ストリング）	
7. 平面技法④スタンプング	
8. 平面技法⑤はじき絵	
9. 平面技法⑥和紙染め	
10. 平面技法⑦ウオッシング（下絵 着彩）	
11. 平面技法⑧紙版画 版下制作	
12. 平面技法⑧紙版画 刷り	
13. 平面技法⑨フィンガーペインティング	
14. 応用作品	
15. 応用作品 まとめ	

クラス単位（30 人～36 人）テーブル 4 人掛けで作業を行う。授業のはじめに技法、手順を説明した後、各自活動を開始。授業で制作した作品は自分で管理し、学期末にまとめて提出する。成績は作品提出と授業態度で評価する。

今回使用した実践記録用紙には

・授業内容／使用した画材・道具／感想を記入し、授業後毎回提出するようにした。

保育内容・造形表現 I		
クラス	学籍番号	氏名
1		
2		
3		
4		
5		
6		
7		

図①（学生用 記入用紙）

3. 各平面技法についてと学生のコメント

この授業では約 10 種類の絵画技法を実践する。その中で水彩絵の具とクレパス（オイルパス）を使用している技法を 4 種挙げ（シラバス下線部）それについての学生のコメントとともに活動内容を振り返る。

1. にじみ絵



図② (学生作品 にじみ絵)

◇方法：あらかじめ水で4つ切り画用紙を湿らせ、その上から様々な色の水彩絵の具を落としにじませる。

◇技法について：

この技法は絵の具を水でにじませるといふ単純なものであるが、その分量によってさまざまな効果が表れるため水彩絵の具の特質を味わうにふさわしい技法である。学生から作業の前に「絵の具と水の量はどれくらいで上手いきますか？」などと質問されることがよくあるが、造形の授業ではまず自分で実際に経験してみて、自分の感覚で色々なことを捉え、問題解決をしていくことが大切だと伝えている。

◇学生感想(抜粋)

・どんな色や模様になるかわからないのでドキドキして楽しかった。
 ・水の量や絵具の濃さによってにじみ方が違うことが分かった。自分の好きな色や景色を想像しながらすると楽しかった。
 ・水をたっぷり紙に含ませて絵具をのせるととてもきれいな模様ことができました。色や塗り方を変えるだけで個性が出て予想もできない作品ができました。他の人の作品もそれぞれ違って、見るのが面白かった。
 ・シンプルだったけど私自身すごく楽しかったです。考えて描くよりも思いのままにやれてよかったです。

小学校以来、水彩絵具を使っていなかったのが戸惑いがありましたが自分のありのままの作品を作ることができました。

・最初は軽くぬってみました。でも上手にできなかったのが腕をふって模様にしてみました。5月の風にしてみました。

・絵具がにじんでいくのが面白かったです。でも自分の思っている色でにじまなかったりきれいににじまなかったりしたのが難しかったです。

・少し考えながら工夫しようと思うようになった。子どものころのように何も考えずに描くことはなくなりました。

・小さな子どもでも手軽にできる技法だと思った。

・絵具を目的なく自分のおもちゃがままに描くことがこんなに楽しいんだと初めて知ることができました。絵具が苦手な子もいると思うので、こんな風に遊べたら楽しいだろうなと思いました。

◇感想から

大学の造形の授業での初めての平面技法ということもあり、はじめは緊張している学生もみられたが、次第に絵の具の広がりや色の美しさ、現れる形の面白さに引き込まれている様子がうかがえた。絵の具でなにか表現するというより、画材を自分で動かすとどうなったか、という驚きが素直な言葉で綴られていた。拙い文章も多いが自分の作った画面のイメージを「5月の風」という言葉に置き換えるなど、新鮮な表現もみられる。

2. 合わせ絵・糸ひき絵

◇方法：合わせ絵(デカルコマニー) 2つに折り曲げた画用紙に絵具をのせて開く

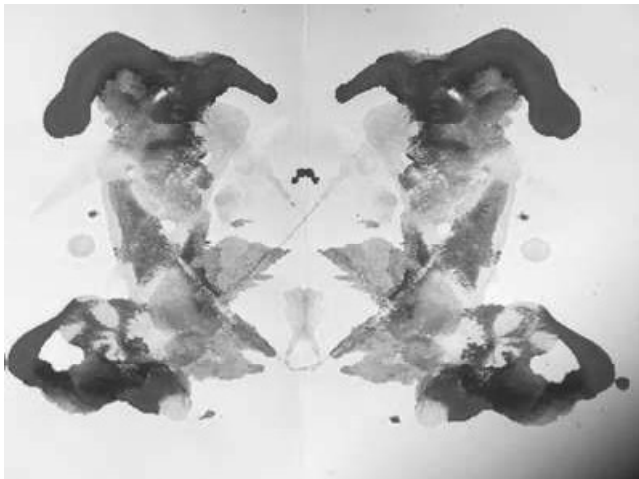
：糸ひき絵(ストリング)

2つに折り曲げた画用紙に絵の具を染み込ませた糸を紙に挟んで抑えながら引きぬく。

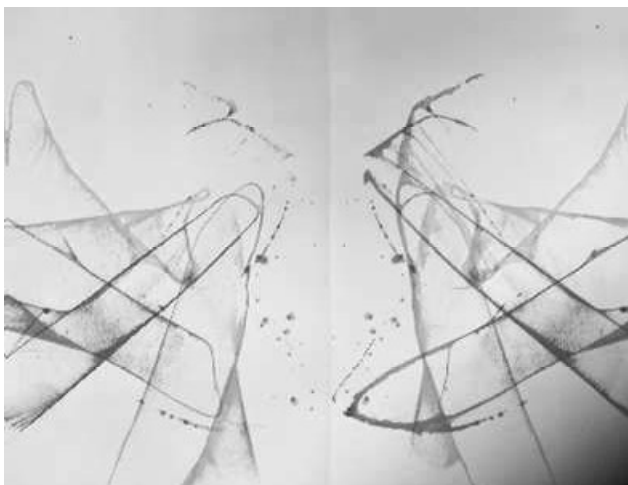
◇技法について：

これらの技法は偶然生まれる左右対称の不思議な

形を楽しむものである。こちらあらかじめ具体的なものを想像して具体的な形を表すことよりも、偶然生まれるかたちを楽しみながら様々なイメージをつくることを目標としている。



図③ (学生作品 合わせ絵 デカルコマニー)



図④ (学生作品 糸引き絵ストリング)

◇学生感想：抜粋

- ・簡単だけど奥が深いなとおもいました。きれいな色とか濁っている色とか何も気にせず無心でできたのが良かったです。
- ・考えるのではなく自由な感覚で色を出したり、糸をつかったりして自由な発想ができてとても勉強になりました。
- ・濃い色同士が混ざるとどうしても濁ってしまい、汚いイメージになりました。絵の具を直接落としてひらいても絵の具自体がのびなくて、べち

よつとした感じでした。

- ・思った模様にならず思いがけない色や模様になりました。グロい色になったりしたけどそれはそれできれいだとおもいました。
- ・こどものころに合わせ絵をやったことがあって今日久しぶりにやりましたが、とても楽しかったです。
- ・子どもたちが何回もする理由が自分もやってみてわかりました。
- ・合わせ絵、センスがなさすぎて納得いくものができませんでした。一枚だけきれいにできました。
- ・デカルコマニーはどんな絵の具の落とし方をしてもいい形になってすごく楽しかったです。糸ひき絵はうまくいかなくて納得できずショックでした。
- ・糸ひき絵は一本の糸を二色で染めると混ざってきれいになった。かすれているところがすごくきれい。
- ・短時間で終わった。思い描いた通りにはならなかったけど何も考えずにやったら違うかんじでできた。
- ・自分の思う通りに遊んでみるのがこんなに楽しいとは。子どもたちがやったらもっとおもしろい作品ができあがるんだろうな。

◇感想から

授業の目標どおり活動自体を楽しんだコメントが多く見られたが、絵の具を使って何か具体的なものを表さなければならないという考えに囚われている学生にとっては納得のいかない結果となっていた。

実際の活動の様子をみると画材に慣れ親しんでいる学生は、絵の具の特質がよくわかっているので、ある程度の混色やにじみを想定して絵の具の反応を観察しながらどんどん画面を複雑に構成していく。また、色の濁った混色も気にせず、さらに手を加えることによって自分の想定外の絵の具の変化を楽しむ様子が見られた。

それに対して絵を描くことに苦手意識を持つ学生は画面が予想外の絵柄になることに神経質で、色が混ざりあい、濁るということを恐れ嫌う傾向

がある。この原因は、育ちの中でのこのような遊びの経験の不足が予想される。それを補うためにもこの造形活動の授業の中では、強制ではなく自発的に取り組んでみようという意識をもたせる環境を整えることが大切である。またこの技法は単純な作業ですぐにかたちが表れるが、学生の感想にみられるように、繰り返すほどに様々なものに変化していく。自分が納得いくまで繰り返し試すためには、のびのびと活動することのできる環境とふんだんに使うことができる材料が必要である。このように造形あそびの要素が強い制作の時は、使う量を気にしないで使用することのできる画材も検討してみたい。

3. はじき絵

◇方法：4つ切り画用紙に模様や自由な絵を描き
その上から水彩絵の具で着色する

◇技法について：

この課題は、クレパスで意図的な連続模様や、具体的なものを描き、その上から黒の絵の具で画用紙を塗り絵の具をはじくクレパスとのコントラストを利用して画面を構成する。



図⑤ (学生作品 はじき絵)

◇ (学生感想)

水彩絵の具でクレパスをはじく瞬間がとてもきれいで見ても楽しかった。

・クレヨンが絵の具をはじくことを初めて知って驚きました。

・絵をかくのは苦手だけど自分なりにできた気がする。
・クレパスどうしの色が混ざって困った。

◇感想から

この画材の組み合わせは保育・教育の現場でよく使用されているはずのものが、『クレパス(油性)は絵の具(水性)をはじく。』ということが体験として理解していない学生が多いことに改めて驚いた。コメントからはクレパスが絵の具をはじくことに新鮮な驚きをもって活動をした様子が伝わってきた。

4. フィンガーペインティング

方法：自分で作った指絵の具で絵を描く。またそのイメージを別の紙に写し取る

◇技法について：

この課題で使用する指絵の具はあらかじめ作り方(小麦と水を鍋でまぜて加熱し、防腐剤としてお酢を入れる)を説明したものを学生が自宅で作って持参することになっている。フィンガーペイント用の絵の具は市販のものもあるが、手作りの指絵の具は透明感があり自然素材が原料であるため手触りが良く、子どもの触感あそびに適している。また、絵の具の素を自分でつくることによって描画素材に対する意識を高める目的もある。



図⑥ フィンガーペインティング 実践の様子

(学生感想)

- ・自分で手作りした指絵の具を使って絵を描くのがすごく楽しくて面白かったです。
- ・何回も描き直せるから失敗をおそれずいろいろな絵が描けてよかったです。
- ・フィンガーペインティングは手触りがぬるぬるして最初少し抵抗がありましたが、何回もやっていくうちに慣れていきました。指一本で絵が描けるなんて凄いなあと思いました。
- ・感触がとても気持ちよかったです。版画みたいに紙にうつすとちょっとした波の感じがでて、良いかんじにできました。
- ・事前に指絵の具を作って新しい発見ができました。手を使ってぬることは良いことだと思いました。
- ・最初は触感がすごく気持ち悪かったけど、絵の具の色を混ぜたらいい感じになったのでとても楽しくなりました。こんな技法もあるんだとびっくりしました。
- ・手で自由に絵を描くのがとても楽しく、やったことのない描き方でした。のりを作るのも初めてで新しいことを沢山できて良かったです。小さい子たちも好きそうだな、と思いました。
- ・手形でお誕生日の本にもしたりできるかなあと思いました。
- ・小麦と水だけで子どもも安全に遊ぶフィンガーペインティングが経験できてうれしかったです。
- ・子どもたちとする時は食紅など安全な材料でしてみたいと思いました。覚えておこう♡

◇感想から

自分で作った絵の具の触感を楽しみながら活動ができたことが伝わってくる。自分で絵の具の素を作ると、その画材に対する取り組みが既成の絵の具を使う時よりも探求心を誘うものであることを実感した。

直接絵の具にふれて手が汚れることに抵抗のある学生も、大抵は友達につられて感触を一緒に楽しんでるうちに作業に参加できるようになる。また、このフィンガーペインティングはデカルコ

マニーの技法と同じく、ある程度の絵の具の量を必要とするがここで使用する手作り絵の具は大量に使うことができるため、のびのびと活動することができ、汚れをふきとることも簡単である。

このように造形あそびの要素が強い技法は、子どもたちの造形活動に合わせた環境を大学の教室でも設定する必要があり準備する絵の具の量や、のびのびと活動できる環境をつくることにも配慮が必要であることが改めてわかった。

(※小麦アレルギーの子どもには配慮が必要であることは伝えている)

4. 活動の記録 まとめ

今回、学生の活動に対しての振り返りを読むと、作業の様子からは読みとることができなかった学生自身の考えや思いを知ることができた。それほど熱心に見えなかった学生が、心の中では、わくわくしながら描画を楽しみ、しっかりと画材についてその効果を確認めながら、様々な工夫を試みながら活動していた様子を伺うことができた。完成した作品からも学生の取り組みの様子や、能力・技量はある程度察することはできるが、それと合わせて本人のコメントをみると、作品で表現したかったことをより理解することができた。

学生の文章は簡易で拙いものが多くみられた。自分の感じたことを専門用語や既成の言葉にあてはめることができないことにより、却ってその時に感じた気持ちが強く伝わってきた。

幼稚園教育要領解説によると『豊かな感性を持つ子どもを育むには教師自身も豊かな感性を持っていることは重要である～また感性を高めることは語彙を増やすことだ。』とある。自分の感じていることを自分なりの言葉に表してみることは語彙を増やす経験になる。表現にはいろいろの方法があり、自分自身の行為を振り返り、それを言葉にしてみるという経験は子どもたちとの活動の中でその表現を受け止め、それを言葉にして言葉がけをすることに必要な経験である。

今回は、学生の感想に対して短いコメントを返

すことしかできなかつたが、今までのように提出した作品を最後に一方的に評価していた時に比べ学生の制作に対する意欲も増したように感じた。ただ、やはり大学の授業には到達目標があり、評価課題として作品制作があるので、学生にとっては活動そのものが義務となりがちである。そのため、学生にとっての記録の目的は自分の活動を客観視して体験した内容とともに自分が感じたことを記憶に留めることなのであるが、教員に対しての報告書になってしまうものも見られた。学生にとって造形活動が義務的活動になると、「迅速に要領よく作業を終わらせ、達成感を得たい！」という思いが強くなり、本来の授業の目的の活動自体を楽しむという意図から外れてしまう。そうならないためには、学生それぞれのペースで、できるだけ自分の裁量で自由に制作ができる環境を整えることが大切だと再確認した。

5. 平面技法 保育園での実践（4、5歳児絵の具遊び）

ここからは、上記で紹介した平面技法を実際に保育の現場で園児と活動した様子を紹介したい。

対象者：ちとせ保育園 16名（4、5歳児）

期間：2018年3月～2019年1月

こちらの園児たちは、自由あそびの中での「お絵描き」を経験しており、一斉保育の中で決められた造形の時間はこの年齢まで設けられていない。今回はその園児（年長クラス）16名を対象に筆者が園の保育の時間内に月に1回（約1時間）描画あそびを行った。

その1・にじみ絵

大学での実践では、平面技法作品の基底材として四つ切り画用紙（厚手）を使用している。先述のにじみ絵の実践で、絵の具をにじませるのに苦戦していた学生もいたため、子どもたちが思い切

り、「にじみ」を楽しむにはどうすればよいかを考え、水が染み込みやすい丈夫で面積の広い「障子紙」を使用した。そして、まずは絵の具を使用せず「筆」と「水」だけでおもいきり描画を楽しむ環境を設定した。



図⑦（ちとせ保育園園児 水描きの様子）

子どもたちは、はじめはそつと筆で、紙に水を落としてみて障子紙の色が変わることを発見し、描画をはじめた。慣れてくると線を描くというよりは水をつけた筆をふりながら勢いをつけて飛ばすダイナミックな活動に発展し、「雨を降らせよう！」紙の上に筆で水を落としはじめた。そのうち水描きに飽きてきた子どもが、「色が欲しい」と言ったところで、あらかじめ溶いた三原色の絵の具（赤・青・黄）を入れたパレットを出した。

子どもたちは喜んで、絵の具を使って描画あそびをはじめ、紙が湿っているところは色が広がることや、上から色を重ねると色が変化している様子を楽しむ様子が見られた。また、大きな障子紙の上に乗って、自分の好きなものをどんどん描き広げていく子どもや、自分の場所を決めて、混色し

てできた色を並べるこどもの様子がみられた。そこでは「こんな色になった！」と色が変わる様子を楽しむ姿が見られた。混色の知識として「赤+青」=紫 「青+黄」=緑 などと頭で理解する前に、このような感覚的なあそびを重ね、体験から身に付けることが大切だと改めて感じた。



図⑧ (園児作品) 色をにじませる・作ってみる・描いてみる



図⑨ 作品の上に上がって描ける場所を探す

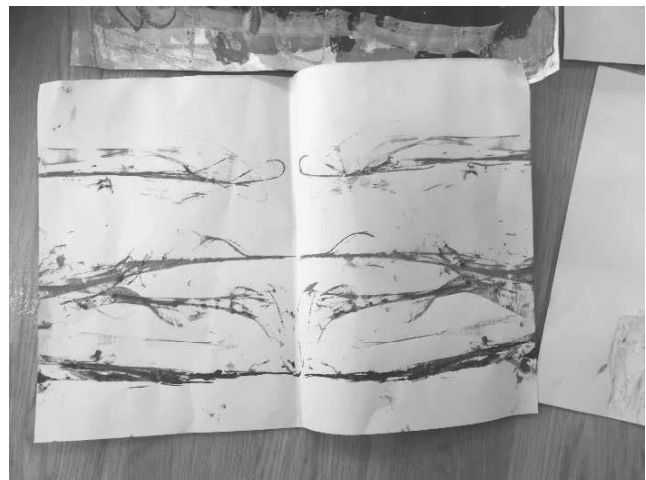
その2. デカルコマニー(合わせ絵)ストリング (糸ひき絵)

子どもたちとデカルコマニー(合わせ絵)と糸ひき絵の技法を行ってみて、学生の取り組みとの一番の違いは、やはり「水彩絵の具そのものに対する興味」である。様々な色を自由に使える絵の具あそびは、園児にとって楽しくてたまらないあそ

びである。大人と違ってこれで「何を表せばいいのか?」「どのように描けば正解なのか?」などということに気にすることがなく、画材を探求し変化を楽しむ。絵の具が変化するように



図⑩ (園児作品 合わせ絵 デカルコマニー)

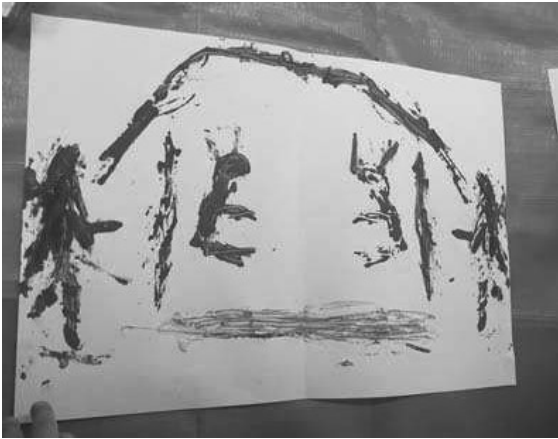


図⑪ (園児作品 糸ひき絵 ストリング)

夢中になって、いろいろな色を試しながら紙を折ったり開いたり、こちらの予想以上に繰り返し遊ぶ様子が見られた。このように活動そのものに興味があるタイミングを逃さず、画材や時間の制限なく活動を見守ることができれば子どもの活動はどんどんと広がっていく。

例えば下の作品(図⑫)のように、偶然表れた形から、自分で思いついたイメージを表現する活動に発展させる園児も見られた。このようなデカルコマニー技法によってできた形を使って、具体

的な絵に表すような活動を学生に提案すると、プレッシャーを与えてしまうことがあるが、子どもたちは、あそびながら絵作りをすることに抵抗はない。本来、デカルコマニーのような表現は「作品をつくること」を念頭においた制作の中でなく、あそびの中で楽しみながら生まれるものであることを再確認した。



図⑩ 園児作品「うさぎと家」



⑩園児作品：デカルコマニーのかたちからイメージして描いた「サクラの木とみんなの顔」

その3. はじき絵

大学では「クレパスが絵の具をはじくこと」を利用した制作をしたが、園では上記の水彩えのぐあそびの最中に「クレパスでも描きたい」という園児がいたため、その結果、絵の具とクレパスを使う『はじき絵』の実践に繋がった。

ここでは子どもが自分の描きたいものに合わせて画材を選ぶ設定にしていたので自然に「クレパスと絵具を同時に使うとどうなるか。」ということを発見する活動になった。

大学の授業内で、教員に色の作り方の説明を求めたり、この面積を塗るにはクレパスと絵の具どちらを使えばいいかわからない、という質問をしたりしてくる学生の姿を思うと、このように自由に描く経験の積み重ねによって適切な道具の使い方と素材の性質を体得していくことが大切であるということ改めて感じた。



図⑭クレパスの描画の上から水彩絵の具をぬる様子

その4. フィンガーペインティング

フィンガーペインティングは大学の授業の感想でも、子どもたちと一緒に実践したいというコメントが多かった活動である。

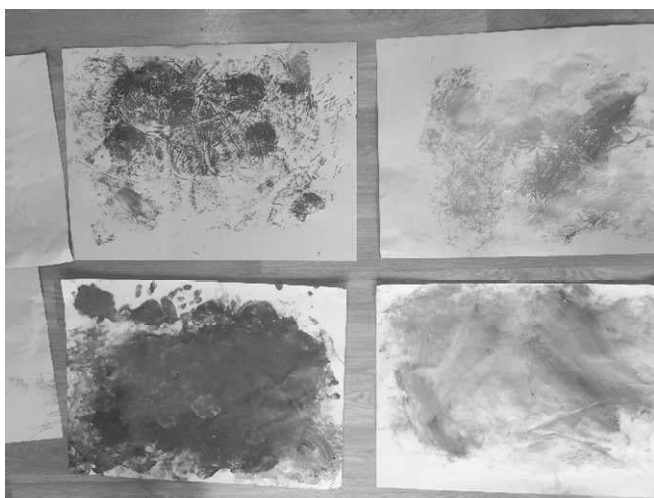
ここまでの実践で絵の具あそびに夢中になると自分から筆や道具を使わずに手に絵の具をつけて遊びだす子どもの姿は見られたので、最初からじかに絵の具に触れて描くフィンガーペインティングに子どもたちは夢中になっていた。

手が絵の具で汚れることを嫌がる子どもは学生としたときとちょうど同じくらいの割合でいたが、ここでも作業を強制せず友達との関わりから自分なりに楽しむ様子がみられた。

多くのこどもたちは素材に直接接触すると、気分が高揚するのか動きがどんどんダイナミックになり話し声も大きくなる。そして活動が盛り上がると手から腕に絵の具を塗り始め、ボディペインティングの遊びにつながっていく。今回も「足で描いてみたい」、という子どもが出てきたのでそれは季節のいい時期に全身汚れてもいい環境をつくって別の機会に行うことにした。



図⑮ (フィンガーペインティング 園児の様子)



図⑯ (園児作品 フィンガーペインティング)

6. 園での実践 まとめ

今回子どもたちと平面技法を実践してみて、子どもたちが絵具やクレパスなどの画材に対して、新鮮な感覚を持って向かい合い、いろいろなことを感じながら真剣に楽しむ姿を実際に見ることができた。そしてこちらの言葉がけや導入の仕方でも活動はどんどん展開し、広がることが実感できた。

保育現場での造形活動は、本来あそびや生活の中から、子どもたち主体の活動として行われるべきことである。今回の実践は、なるべく子どもたちと、話をして子どもたちの意向に合わせる活動ができるように心がけた。その過程から、限られた時間の中で子どもの興味や発達に合わせた表現活動の見通しを立て、あらゆる可能性に対応できる活動環境を整えることの難しさを改めて感じた。

7. 今後の課題

学生は子どもたちの姿を想像しながら授業での活動を行うが、多くの学生にとって子どもの造形活動に触れることのできる機会は保育・教育実習期間に限られている。学生のうちに子どもの多様な姿や表現を想像することは難しいが、それだからこそ、学生自身が平面技法の実践を通してじっくりモノ（画材）と対話するように作品を作って自分自身の子どもの頃の新鮮な感覚を呼び覚ますことが大切なことであると思う。

画家のオディロンルドンは著書の中で『子どもはその精神に、新鮮な驚きをもって触れやすく、またそのもの（画材）の持つ力を受け止める力を持つものだということは、彼らの描く線や筆の勢いから感じることができる。』と述べている。また『芸術家（と子ども）は、また彼を囲む世界と場所から影響を受ける他に、彼の用いる材料の要請にもある程度従わざるを得ない。エンピツ、木炭、パステル、油絵具～略こういうものが彼の同伴者、協働者として彼の語る物語に参加する。材料はそれ自体の秘密を持ち、精神がある。』とある。大学の授業の中では実際の子どもの目の前に

いなくても、まずは自分自身がしっかり画材の特質を味わい、向き合うことで材料のそれ自体の秘密を子どもの心を想定しながら自分なりに探求することができる。

今回、学生は自分の活動記録をとりながら自分の行動を振り返りを行ったが、今後はそれと同時に表現についての自分や周囲の人との対話をして造形活動の根幹を探る時間が必要だと考える。

これから ICT の技術がどんどん保育や教育の現場に導入されることが予想されるが、そんな中でこそ実体験や生身の人間同士の学び合い「対話」の機会が必要になる。造形活動において学生が様々な素材、人との関わりや対話の経験の引き出しをたくさん持ち子どもたちとの活動に挑むことができる環境をつくることができるよう、筆者自身も子どもと共に学ぶ機会を多く持つようにしていきたい。

過程でも取り戻すためには、内的な世界を子どもとともに味わい、充分に楽しめる先生と出会うことが求められる。本研究が今後も継続して論考され、子どもたちが心の深みに沈み、そこで遊び、感じ入ることができるように、そのプロセスを見守り伴走できる先生へと、学生たちが育ってくれることを願う。

(担当：番匠明美)

引用文献・参考文献

- 岡本美和子・石田敏和（2014）造形表現 実践
 保育内容シリーズ 谷田貝公昭監修 一藝社
 汐見稔幸 監修（2017）保育所保育指針ハンドブック 廣済堂
 Odiron Redon 池辺一郎訳(1983) ルドン 私自身に みすず書房

ピアスーパーバイザーからのコメント

本稿は「保育内容・造形表現」の講座における表現技法の実践とその活動記録をとおして、各平面技法の基礎技術を習得することの意義と、その体験が学生にとってどのような意味をもたらすのかを明らかにしようとしたものである。また、さらに保育園児を対象者とした造形表現の実践をとおして保育・教育者にこそ求められる学びの姿勢と環境とは何かを考察しようとしている。早く、より多く、正しい答えを出すことが要求されがちなかで、子供たちが本来持っているはずのひとりひとりの大切な時間の流れを教育の